

「千葉氏を語る」

「だより」

第2号

千葉氏を語る会
発行日
平成28年7月1日

第二回総会開催される

去る五月二十八日(土)千葉市内きぼーる会議室で第二回千葉氏を語る会の総会が定刻午後一時三十分に向事務局長の司会で始まった。司会者から本会の会員数七十四名、本人出席者二十八名、委任状による出席者十六名計四十四名であり規約第八条第二号によりこの総会は成立しました。との報告がありました。

開会に先立って去る四月一日に逝去された当会学術顧問の川村優氏に対する一分間の黙祷が捧げられた。会議は向後会長の挨拶から始まり、(別掲載)議長の選出について司会者から議場に諮ると司会者一任の声により鷺見副会長が選出され、議事録署名人に山内博氏と江波戸弘安氏が選任されて、議案の審議にはいる。鷺見議長より議案第一号から第3号

までを一括して議題とするとの提案により、第一号議案平成二十七年

事業報告書を丸井副会長から報告、

日向事務局長から第二号議案平成二

十七年度収支報告書の説明、仙石監

事から監査報告があつた後、議長か

らこの三案に ついて議場に諮る。

満場異議無く原案どおり承認された。

次に協議議案第二号に入り丸井副

会長より平成二十八年度事業計画に

ついて説明があり、日向事務局長よ

り議案第三号平成二十八年度収支予

算についてそれぞれ説明があり、議

長よりこの二案について議場に諮る

と、次のような質問があつた。

質問 平成二十八年度収支予算に

ついて、前年度からの会員と今年度

の新規会員の会費に差があるのはど

ういうことか

回答 平成二十七年の本会設立の時期による会費の調整を平成二十八年度において行うものであり、年会費には変更はない。前年度の会員に關しては当会設立が前期中間過ぎになつたため、期末の残金が多く、今回に限り半額の一千五百円としたものである。

以上の質疑の後、議長から本件に際し改めて議場に諮る。満場異議無く原案どおり可決された。続いて協議議案第四号定款の一部変更は丸井副会長より幹事の定数の増加について説明があり、議長から議場に諮り満場異議無く可決された。次に役員

の選任について丸井副会長から説明があり、議長から議場に諮り、満場異議無く可決された。議長から本日の総会に付議すべき事項の全てが承認されましたので総会を終了しますとの発言があり、これをもって総会は閉会しました。

会長挨拶

千葉常胤が千葉に来てから、今年の六月一日で八九〇年となり、六月四日中央公園にて行われる祝賀会に市議會議長として出席を予定している。

千葉市民、県民として郷土の歴史を知り、アイデンティティとして意識すべく、以前千葉市長に子供の時から千葉市の歴史を教育して貰いたいと申し上げた。今年三月にまんが「千葉常胤公ものがたり」が完成、各小学校に四十冊づつ配付された。その後高等学校長会より内容についてどこに問い合わせたら良いか明確にして欲しいとの依頼があつたが、当本には監修者の記載が無く、責任ある対応が取れていない。又本を欲しいとの要望が多く、百八十円で販売の予定である。

総会終了後午後二時三十分から丸井副会長から総会記念講演として「奥州相馬氏と野馬追」と題しての講演がありました。

奥州相馬氏と相馬

野馬追の歴史

副会長 丸井敬司

一、奥州相馬氏の成立

相馬氏の本領とされた下総の相馬

郡は、師常の祖父千葉介常重が大治

五年（一一二六年）伯父常晴の養子

となつて継承した所領であつた。常

重は相馬の所領を継承すると大治五

年（一一三〇年）には、この所領を

伊勢神宮に寄進し相馬御厨が成立し

た。しかし、この所領は下総の國司

藤原親道や頼朝の父義朝、佐竹など

から侵略を受け、頼朝挙兵時の治承

四年（一一八〇年）には上総介広常

の弟相馬常清の所領となつていた。

しかし、寿永二年（一一八三年）広

常が頼朝に誅殺されると再び千葉氏

の所領に戻つたものである。このよ

うに相馬領が最終的に常胤の所領と

なると常胤はこの所領を次男の師胤

（後に師常に改名）に譲つたが師胤

の相馬領の入部は、簡単では無かつ

たようで、師胤は将門の子孫とされ

る相馬師國の養子となつて相馬姓を

継承しなければ成らなかつた。（相

馬系図）。実際、師胤が千葉姓から

相馬姓なるのは、奥州合戦であつた

が恐らく師胤から師常に名を変えた

時期は、この時期と推定される。（以

後、師胤については師常とする）

こうして千葉流相馬氏が成立する

が、この相馬氏が奥州に所領を獲得

したのは文治五年（一一八九年）の

奥州合戦の功績に寄るものである。

奥州合戦では師常の父常胤は東海道

大將軍として浜通りを北上し、岩

城・宇田・行方（なめかた）・亘

理を制圧し、多賀城で頼朝の軍隊

と合流した。この功績で常胤は頼

朝より岩手の東磐井郡（一関市周

辺）、三陸の気仙郡（陸前高田市）・

岩城・宇田・行方（相馬、南相馬

市など）の各郡を所領として与え

られた。常胤はこれらの所領のう

ち、宇田、行方両郡を師常に継承し

たのである。

こうして師常は下総と奥州に広大

な所領を獲得した。この所領は、師

常の没後、義胤・胤綱・胤村・師胤・

重胤と継承されたが、重胤の代に奥

州の所領の一部を北条氏得宗家御内

人であつた長崎思元によつて押領さ

れる事件が起こつた。重胤はこの原

因が、下総國相馬郡に居住していた

事にあつたとして元亨三年（一一三二

三年）四月、岡田氏、大悲山氏など

と共に陸奥国行方郡に移住したとさ

れる。また、この時、家臣八十三騎

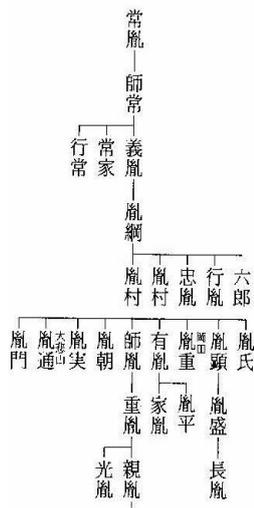
が重胤とともに奥州に移住したとさ

れる。「陸相志」によると、この時、

千葉氏一族の守護神とされる「星の

宮」（妙見社）を勧請下とされる。

奥州相馬氏略系図



なお、移住当初の拠点とされたの

は行方郡大田村別所（原町市）であ

り、嘉暦元年（一一三二六年）に同郡

小高城（相馬郡小高町）に移つたと

されているが、元亨二年（一一三二二

年）の七月四日付けの「関東御教書」

には「小高孫五郎（重胤）殿」とあ

る事から、実際に重胤が奥州に移し

たのは元亨二年であつた可能性もあ

る。さて、奥州移住後の相馬氏は南北

朝や戦国時代の争乱を乗り切り、師

常より一六代目に当たる義胤は小田

原の秀吉に参陣して秀吉より奥州内

に四万八千七百石を安堵された。こ

の後、慶長五年（一六〇〇年）の「関

ヶ原の戦い」には、上杉氏に同調し

て出陣しなかつたため一時、家康に

よつて改易されるが、義胤が隠居し、

子の利胤が家督を継承して、本領安

堵に奔走した結果、同年十月、宇多

郡の一部、標葉郡、行方郡の所領を

安堵された。この後、相馬氏は、小

高城に戻り、同十六年（一六一一年）

中村城（福島県相馬市）を築いて、

ここに移つた。以後江戸時代を通じ

て相馬氏は中村城を居城として六万

石の大名として明治維新まで続いた。

二 相馬野馬追 奥州相馬氏の所領

のあつた相馬地方の伝統行事として

知られているのが「相馬野馬追」で

ある。この相馬野馬追は現在、相馬



太田神社・小高神社・相馬中村神社の妙見祭の行事として行われているものである。この行事のハイライトは甲冑競馬と神旗

争奪戦である。この甲冑競馬について

は本来、相馬氏の本家に当たる千葉の妙見宮の祭礼の際行われた神事である。戦国時代の連歌師で有名な飯尾宗祇の弟子柴屋軒宋長（さいおくけんそうちょう）が著した「東路の津登（つと）」には「千葉の崇神妙見の祭礼とて、三百疋の早馬を見物也」とある。この記録から甲冑競馬の原型は千葉庄の妙見祭における早馬で、これが下総の相馬地方に伝わり、更に奥州に伝わったものと考えられる。

さて相馬地方では、この行事の起源は、相馬氏の先祖である平将門が領内の下総國相馬郡小金原（現在の松戸市）に野生馬を放し、敵兵に見立てて軍事訓練をした事に始まると

云われている。相馬氏は千葉から相馬御厨に移住した後も、この行事を妙見信仰の神事という名目で続けていたが、明治になるとこの行事は一時消滅した。しかし、原町の相馬太田神社が中心になって野馬追祭の再興図り、明治十一年（一八七八年）には内務省の許可が得られ野馬追が復活した。

本年度初の現地見学会 池田の池の見学

昨年は本会が発足して初めての事業年度であり、その締めくくりの最後の事業として去る三月十五日吉野秀夫先生の「更級日記」と池田の池と題して講演会がありました。それを受けて三月二十六日現地見学会が行われました。当日は午前九時千葉神社前の通町公園に四十二名の参加者があり、先生から本日の計画の概要説明があり、まず最初は同神社南側の広小路交差点で古東海道と鹿島道の交差する地点の説明があり。続いて中央区道場南のちびっこ広場で過去にボーリング地質調査を実施した。その結果最高〇・九米の盛土が

ありその下に砂礫層が続いていることを説明し、現在でも地盤が軟弱で周囲が住宅地になっているのに住宅の建築が不可能である。更に南に向かって湾曲した道路は池の端のような印象がある。引き返して吾妻町通りを南へ吾妻橋に到着する。この吾妻橋が往古の君待橋ではないかと説く。この橋には三つの伝説があり、

一つ目は若き男女の恋物語であり、二つ目は一千二十年前の藤原実方という人が、ここ君待橋と聞いて京都

にいる恋人に和歌を読んだと伝えられています。第三には源頼朝が安房の國から下総の千葉に着いたとき千葉常胤と胤頼は白旗を掲げて出迎えたと云われています。（これらは三月十五日の講演で話されたもの）更に移動して、近くの本町公園に行く。ここも平成二十一年（二〇〇九）ボーリング調査を実施した。ここは周囲が完全に市街地に囲まれており、「池田の池」の西湖岸付近に位置するのでは無いかと推定される。地表から〇・一米は礫（コンクリート混じり）で明かな人口盛土であり、次

に深度一、〇米までは細・中粒砂状である。その下深度一・〇米から一、七米に黒色がかつた有機質シルト層が挟まっている。僅かに貝殻と植物片が含まれるが量は少ない。色は褐色から黄褐色を示すことが多い。（ボーリング調査の資料による。）その結果この公園に千葉市と協力して「池田の池」の表示板を建てた。続いて全員で県庁近くの羽衣公園に移動する。

ここでは羽衣公園にある羽衣の松の由来を説明板の通り紹介します。昔、千葉の亥鼻城下に、千葉の蓮の花の咲き誇る池田の池という美しい池がありその周辺は蓮の花盛りの頃は多くの見物人で賑わっていた。何時の頃からか静まりかえった夜半になると、ここに天女が舞い降り、傍らの松の枝に羽衣を掛け、蓮の花の美しさに見入っていたという。この天女のうわさは、時の城主、平常将の知るところとなり常将は美しい天女を是非自分の妻にしたいと思い、家来に松にかけられている羽衣を隠すように命じた。羽衣を失った

天女は天に帰ることが出来ず、常将の妻となりやがて立派な男の子を産んだという。

この話は、京の天皇のお耳にも達し、天皇の命により参内した常将がそれまでの事情をありのままに申し上げたところ天皇は深く感銘され「これは前代未聞のことであるので其の地方を千葉の蓮の花にあやかつてこれからは千葉と名乗れ」と仰せられた。常将はその時から千葉氏を称したという。（「妙見実録千葉記」等の記載による）

この羽衣公園は、このような伝説を秘め、県民の憩いの場として親しまれてきた。

伝説中の池田の池は、この付近にあったと言われ、天女が羽衣を掛けたという松は、この後、長い間、濃い緑を失わず、人々は千葉八景の一つとして大切に愛護して来た。（以下略）

このあと中央公園まで移動しここの地質調査について、海底の痕跡物も河川の痕跡物も出てこなかった。

古東海道と頼朝の進路

現地見学会開かれる

本年度の最初の事業として四月二十四日小雨の中、一昨日佐々木講師の古東海道の講演を受けた四十六名の参加者が千葉駅前を出発した。先ず吾妻町通りを南に進み光明寺（不動尊）前を過ぎ吾妻橋に至る。ここで佐々木講師から「ここは千葉神社（妙見宮）の正面参道であつた」と言う説明在り吉野講師が三月二十六日の見学会で述べられている昔あつたという君待橋のあつたところである。更に南へ進むと道は急に狭くなり、古い佇まいの家並みが続き、そこには現在でも千葉神社の祭礼（親子三代夏祭り）に使用されている御神輿の御仮屋（神社を出た御神輿が一晩お泊まりになる所）がある。この先で旧国道を横断して千葉市立郷土博物館の階段したに着く。ここから現在の道は大幅に拡幅されているが古東海道の面影のある道になる。すこし進と高德寺があり、ここから道は二手に分かれ、左へ進むと千葉高の下に古道らしい小道となり、右

に進むと道路の左側に水路（現在暗渠）がある。この水路は江戸時代初期の頃、三川（現在の寒川村）出身の布施丹後常長が、毎年千駄に悩む三川村周辺の農民のために私費を投じて慶長十八年（一六三三）から十二年かけて延長五、四キロの丹後堰水路を完成させたものである。一昨日の佐々木先生の説明の中に古代東海道の道路構造は道路の両側に排水路が敷設されているとありました。房総には宝亀二年（七七二）十月に古代東海道が設置されてから八四五年後の慶長年間にこの側溝を水路に利用すると云うことはごく自然だと考えられるが如何でしょうか。さて、丹後堰水路に沿って進むと右の道も左の道も三〇〇米程で大網街道（県道二〇号線）にでる。ここに稲荷弁天の祠がある。水路と県道との接点には大正十五年（一九二六）に設置された橋がある。水路はそのまま県道の下をくぐって南に進む。さらに一部は暗渠となり、所々で埋め立てられながらほぼ直線で続き千葉寺駅近くで切れている。

一方小道は県道と一緒に約五〇米進むと又右の小道へ入る。ここが問題点である。県道は左方向に進み百米程で左折して千葉寺の正面山門に至る。千葉寺三叉路から県道と別れて南下する道が古代東海道と云われているが、今回は先ほどの右に入った小道を南下し崖の中腹を進み、途中には江戸時代のものと思われる庚申塔があり、今でも地元の人々の信仰を集めている。この庚申塔の手前から左へ坂道をのぼり県道へ出て千葉寺へと向かう。千葉寺境内で佐々木先生から千葉寺の由来等について説明があつた。またもと来た道を庚申等まで戻り崖の中腹の小道を約六〇〇米京成電鉄千葉寺駅近くで市道と合流する。この先は一直線で南に進み宮崎町に入る。ここには菰池という農業用水のための池があつたが、戦後住宅開発が進み現在はこの地に宮崎小学校と菰池公園が造成され市民に親しまれている。ここで私達の歴史の道現地見学会も終了しました。

大椎城と立山城

千葉氏を語る会 恩田英熙

「上総国町村誌」に大椎城址は大椎村字城山に在り、高丘に位置し、初め平忠常これを城き(略)後、千葉常兼再修してこれに居る。(略)太治元年(一一二六)丙午二月常兼卒す。所領を次子常重に譲る。(以下略)とある。

平忠常が築城したと言う大椎城址であるが、現在では直線連郭式の構造遺構や中世に起源をもつ「ねごや部落」が存在している。平安末期の平忠常・常兼(忠常のひ孫)常重の居城址ではなく、中世城郭址となっている。発掘すれば忠常や再修した常兼の城址が出てくるのかそれとも、中世に直線連郭式の城に改築されたときに、破壊されてしまったか、この大椎城址は、それを実証する本格的な現地調査が一度も行われていないので解らない。であるから現在のところ平忠常が築城し、常兼が再修したと云われるがまったく不明である。平忠常、常兼、常重の居城が大

椎にあったことは間違いないとされている。

大椎城の調査についてであるが、千葉市が昭和四十六年(一九七二)市政五十年記念事業の一環として測量調査が行われ。後藤和民氏の「大椎城址の調査上・下」にまとめられているので参照して戴きたい。

常兼は千葉姓ではなく、大椎に住していたので地名の大椎を姓として大椎氏を名乗っていたと思われる。常重が常晴(常兼の兄)の養子になって相馬郡を譲られた時の条件として上総国にある常兼の所領を常晴に渡す約束であったらしく居城のある大椎城は常晴に渡し千葉郷の亥鼻に移住することになった。大治元年(一一二六)のことである。この年の二月常兼が八十三歳で卒した(千學集)。元永元年(一一一八)常重に家督を譲り、隠居したという。大椎城から村田川を渡った向い側(大木戸町)に「隠居城」と呼ばれていた立山城址がある。常兼は大椎城を常重に譲り立山城に移ったと思われる。この

立山城は付近に馬に関する伝承が残っていて放牧場、馬場、馬の水飲み場址などである。想像をたくましくすれば、平忠常の三百騎以上の武士団の馬はここで供給され訓練されていたのでは無いか。

大治元年(一一二六)六月一日大椎常重は千葉に移住し、千葉氏を名乗ることになる。後常澄の子息大椎五郎惟常が入部して領したという。千葉氏が千葉郷亥鼻に居住する以前の地が大椎であった事が重要である。

一口メモ 千葉介成胤

千葉介成胤は久寿二年(一一五五)三月二日、父千葉介胤正の長男として生まれ幼名は加曾利小太郎と言われた。若千十七歳の時、源頼朝の伊豆での挙兵から始まり千葉館への平家方の藤原親正が下総國北条内山館から一千騎の兵で攻め込んできた。留守役の成胤は六・七騎で近くの結城が浜で合戦し妙見の支援を得て大勝する。四十八歳で千葉介を相続し子供は、胤綱、泰胤、時胤、覚仙、

それに女子が一人(北条時頼の側室建保六年(一一二一八)四月十日六十歳にて没、法号は仙光正珍という

会員募集中

- ◆ 本会では会員を募集しています。
- ◆ 年会費 三千元
- ◆ 活動 講演会・勉強会
- ◆ 連絡先 日向安昭

090-8305-6601

編集後記 編集者

本会も会員皆様の御協力により去る三月をもちまして初年度の事業を完了し五月二八日の総会を無事終了しました。これを受けて会報も第二号を発行することになりました。愛読して戴ければ嬉しいです。振り返れば昨年七月に本会が発足して十一月には講演会シンポジウムを開催し、明けて三月には初の池田の池現地見学会を行いました。これからも会員皆様の投稿により編集したいと思います。是非原稿をお寄せ下さい。

